



『空っぽの器』友の会ニュースレター 第12号 2019年11月発行

「空っぽの器」の目的3ヶ条 樋野興夫

新渡戸稲造記念センター長、順天堂大学名誉教授、順天堂大学医学部病理・腫瘍学客員教授

『からし種』は、「どんな種よりも小さいのですが、生長すると、どの野菜よりも大きくなり、空の鳥が来て、その枝に巣を作るほどの木になります」（マタイ13:32）、これは、「良き空っぽの器」のモデルでは、なかろうか！人間は、自分では「希望のない状況」であると思ったとしても、「自分の置かれた如何なる境遇」にかかわらず、「人生の方から期待されている存在」であると実感する深い学びの時が与えられている。その時、その人らしい「役割・使命」が発動してくるであろう。人生の「目的」は、「器」を頑丈にし、徐々に大きくすることであろう。「空っぽの器」の目的は 1) 「真の知識」 2) 「あらゆる識別力」 3) 「真にすぐれたものを見分ける」の実践であろう。

「空っぽの器」の実践

目白がん哲学外来 森尚子

台風19号が多大な被害を残していった翌日、東久留米読書会に参加しました。読書会が終わったとき、多摩川せせらぎカフェ代表の岡内泰子さんから電話がありました。「台風で自宅兼会社が床上浸水 大変なことになってて 掃除と後始末で4日後のカフェは無理よね。」私は言葉を失い、思わず樋野先生にスマートホンを渡しました。しばしの会話の後「空っぽの器で良いと先生が言われたからカフェやるね」と、元気な声がありました。

カフェ当日、「空っぽの器」は愛であふれていました。その後、岡内泰子さんから、このような言葉を寄せて頂きました。『名実ともに「空っぽ」状態でのカフェ。「器」の中は大勢の方の「心」でいっぱい。「器」はご参加くださったみなで、器の中身を分かち合い持ち帰っていただきました。私は手元にある「空っぽの器の底」を今見えています。この1年の間に、このような素晴らしい「底」が出来ていたことに気づきました。「器」を創ってくださった、みなさんに心から感謝申し上げます。』この言葉に勇気づけられました。これからも、底が頑丈な「空っぽの器」を、皆さんと少しずつ大きくしていければと思っています。

ドキュメンタリー映画『がんと生きる 言葉の処方箋』に出演して

松本がん哲学みずたまカフェ 齋藤智恵美

ドキュメンタリー映画『がんと生きる 言葉の処方箋』の完成の知らせを監督の野澤さんから頂いたのは、ちょうど一年前の今頃でした。出演へのお声がけを頂いたのはさらに一年遡った二年前の11月。映画に出演することがどういうことなのか分からないまま、勢いに任せて出演の承諾をした私。世の中にはそれぞれの病状、想い、環境、大切なものを抱いてがんと共に生きている人がたくさんいます。何の変哲もない私が映画に出演してもいいのだろうか。そんな心理的葛藤を抱えたまま撮影は進みました。今ならわかる気がします。野澤監督の目に映っていたのは、映画そのものでなく、映画を観た人が描く、それぞれの人生におけるこれからの風景であることを。

それぞれの人生や様々な出来事が絡み合いながらも、一人一人の人生はとても特別で、かけがえのないものだ、ということをお出し作品に出演させて頂き、橋渡し役を務められたことを、今とても光栄に思います。



目的
1) 「真の知識」
2) 「あらゆる識別力」
3) 「真にすぐれたものを見分ける」の実践。

編集後記：私もカフェを4年間継続して開催できたのは、ただただ「空っぽの器」だけを準備してきたからです。今後は樋野先生に提示していただいた『「空っぽの器」の目的3ヶ条』も意識しながら続けていきます！

シャチホコ記念カフェ 彦田かな子

